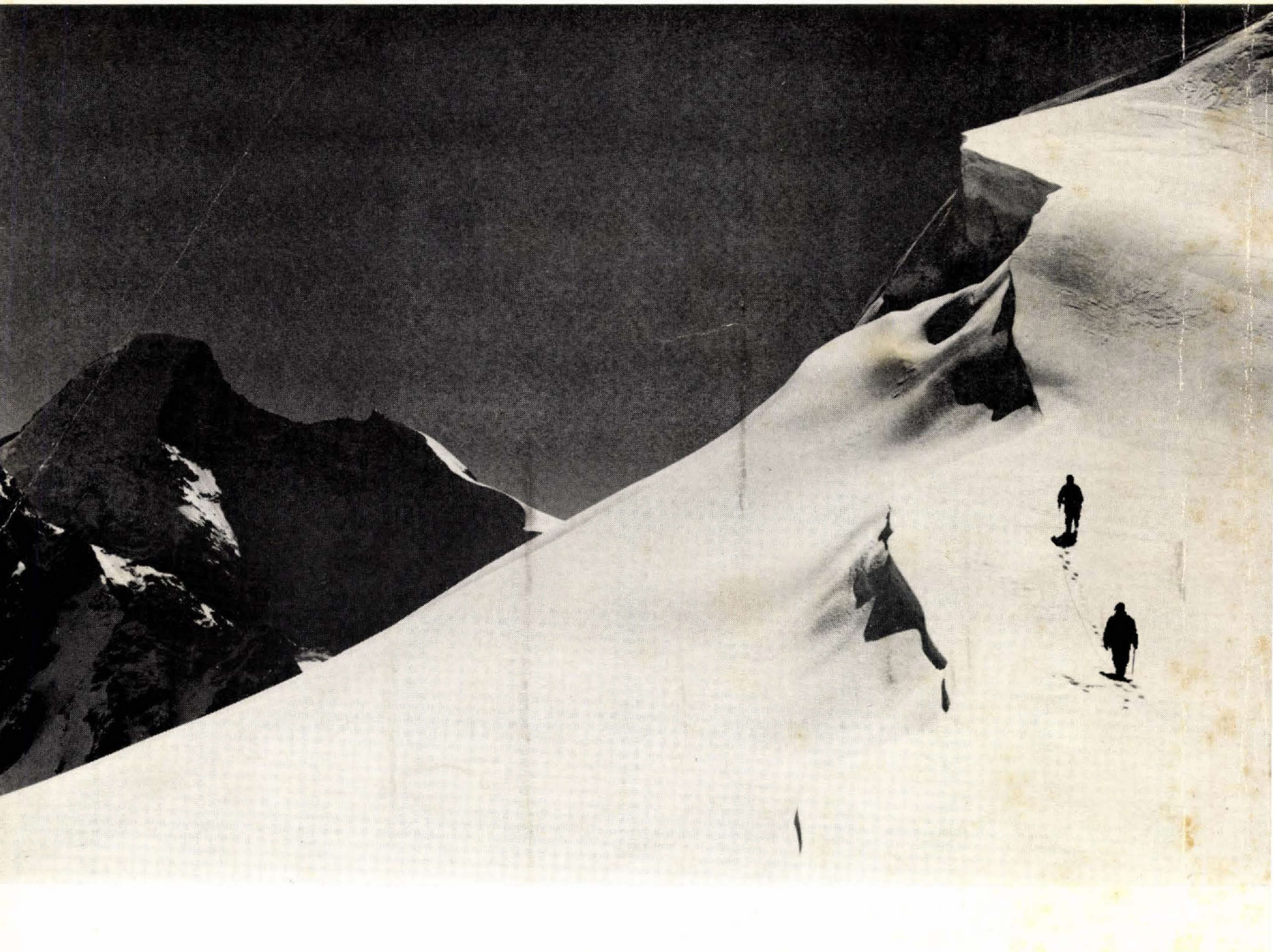
針葉樹会報

復刊 第23号
1968. 9



目　次

慎重居士……中川　孫一……(1)
追　憶……近藤　恒雄……(2)
五十嵐数馬君の思い出……村尾　金二……(3)
五十嵐数馬君を失う……松木　謙三……(4)
書評『ロシュ・ゴル氷河の山旅』
　を読んで……望月　達夫……(6)
『遠い山近い山』を読んで……岩崎　利一……(7)
国際山岳連盟総会へ……吉沢　一郎……(9)
一〇才から六七才まで
　五色ヶ原追悼山行のよせ書……(10)
可先生一周忌とオーション会……吉田　義則……(14)
四国の山々……岡田　健志……(15)
会員便り……(16)
住所変更のお知らせ……(18)
会計中間報告……(18)
会務報告……(18)

慎重居士

中川孫一

トンちゃんとは、一橋大学山岳会発祥の年、大正十一年七月、燕槍班の一員として山行を共にしたのが交遊の始まりである。

その頃はスポーツ登山の黎明期であったから、今の装備から見たら、何から何まで間に合せであった。リュックも市販品が無いので、奥野が三田通の水野というテント屋に特注して、防水したカンバスで作らせた。価値は一円五十銭か二円ぐらいだったろう。ポケットが前に二つ、サイドに二つあり、マーキュリーを赤ラシヤの打抜きで作り、雨蓋に縫付けた。足拵えは草鞋、脚伴、富士山の焼印のある金剛杖を小脇にかいこみ、飯田橋駅（当時中央線始発駅）から出発した。一行は予科三が金田、中川、予科一が五十嵐、吉沢、三富、黒瀬の六名であったが、三富、黒瀬両君は山岳部と縁が切れた。五十嵐、吉沢の両君は、関東大震災で予科が石神井に移ったので、中村橋に山仲間と「動物園」を造って合宿した。針葉樹会の報O・B連に、動物名の愛称があるのは、この動物園から発生したのである。

この山行にトンちゃんの冠っていた帽子が、ボーイスカウト用のツバの広い帽子で異彩を放っていた。その颯爽とした英姿は、前穂高の三角櫓（その頃は現存していた）を背景にした記念写真に残っている。

燕槍班には穂高は含まれていなかったが、上高地まで来て、明日は焼か前穂かという段になって、前穂を選んだ。

今の岳沢の重太郎新道は勿論無かったから、旧道を登った。登っても、登っても、次から次と偽前穂のピークが現われて一行を悩ました。幾つか渡った雪渓には踏跡が全く無かったので、その年の初登頂になった。落石がすごい勢で落ちてゆくのに肝を潰したし、黒瀬が手をかけた大きな浮石がグラッと崩れたときには肝を冷した。

其夜の宿は旧五千尺で、二人の見知らぬ客と同室した。お互に名乗り合って先方の差出した名刺を見ると、浦島亀太郎、山越長之助とあったので、危うく笑い出しそうになった。先方は直ぐ察したらしく「下の宿（多分島々だろう）でも、番頭が宿帳をもってきて、警察がやかましうございますから、どうぞ御本名をというので、これが本当の名前ですと納得させるのに骨を折りました」といった。

東京に帰って暫くしてトンちゃんから電話がかかってきた。「浦島さんは実在の人物ですよ。名刺にある大崎の家を見に行ったら、チャンと表札がかかっていた」

この浦島氏は、その頃野村（山種か）に勤めていたトンちゃんの後に明治製菓の社長になり、んは、株式の高売のことで、浦島さんに面接したということで、浦島さんに面接した。

大崎までわざわざ真偽を確かめに行ったというところに、トンちゃんの面目が躍如としている。

×　×

彼の思出にはもう一つ珍話がある。大正十四年の夏、卒論起草のため、私は木曾王滝の人夫小屋の一角（？監督室）に陣取っていた。勉強の方は一向捗らず、毎日御料林の中を歩

五十嵐数馬氏をしのぶ

きまわっていた。そこへトンちゃんが訪てくることになった。木曾御料林への起点上松から王滝までは、御料林専用の森林鉄道が、王滝部落民のために開放されていたが、外来客は、王滝出張所の発行する乗車証をもっているか、迎えの人と同行するかしないと、乗せてもらえないので、私が出向くことになっていた。

その前夜、人夫小屋では、砂防工事の完成宴が開かれ、私も招かれた。小屋の傍に飼っている鶏の雛をつぶしたのや、煮魚やまめを肴に大宴会になった。酒は徳川正宗というエタイの知れない銘酒（？）であるが、甘口で江戸時代尾張藩の山であった木曾に徳川正宗があるのは、ふさわしいなどと考えながら、鱈腹飲み且つ喰い酔い潰れて、自分の室にブツ倒れて寝込んでしまった。

相当明るくなって眼が覚めた。起き上ろうとすると、コワソモイカニ、首から上は動くが、手も、足も、ビクともしない。寝返りもできない。徳川正宗に当ったらしい。悪質な宿酔と判ったが、どうすることもできない。御承知の通り、時の経過を待つばかりである。トンちゃんを迎えにゆくことができない。他人に頼むにも、顔見知りでない。何とかなるだろうと観念して、ノビていた。午後三時頃になると、ようやく手足が動くようになったので、杖にすがって小屋を出た。脳出血患者の歩行訓練のような格好で、小屋から少し行ったところで、パッタリ出会った。出張所の官会の倉沢技手の客だと名乗ったので、無事に森林鉄道に乗れたのである。

徳川正宗の祟りはまだ続いた。夏も終りになって東京へ帰るというので、倉沢技手が、お別れのパーティを開いてくれた。ところが盃が鼻の先まで近づくと、グッと吐気がこみあげてきて、飲むことができない。

大した宿酔の魔力である。それは東京まで持越された。忘年会でも飲めなかった。その話を後年女房にきかせたところ、ガッカリしたような声で云った。

「そのまま続けばよかったのにねえ」

× × ×

万事に慎重で、決して楽観しない性格には、若い頃から、老成者の風格があった。九郎ちゃんの転職を、わが事のように心配していた姿が思い出される。持病の胃弱をあれほど用心していたのに、それが命取りにならなかったのは、さすがのトンちゃんの読みにも盲点があったと見える。

追憶

近藤恒雄

八月二十日夜上野から急行「北陸」にかねての計画に従って村尾君と寝台車に乗った。行先は薬師岳からスゴ乗越を経て越中沢岳・鳶岳・五色ヶ原・立山と云う小計画である。車中村尾君は五十嵐君の容態が良くないとの話である。何んでも歯から毒が入ったらしい。熱も相当に高く病院へ行ったが面会謝絶で心配だと云う。然し何時も彼に会えば体中全部が悪い様な事を云って居る。五十嵐君の事であるから今度も亦「どうも良くないがまぁまぁだょ」と例の調子で漂々然たる彼に会える事に決めて居た。二十七日小生より一日遅れて帰京した村尾君から電話で「五十嵐君が逝くなった」と聞いて本当に吃驚してしまった。何んとも悲しい知らせである。大正の末期から昭和の初めにかけて東京商大の山岳部には五十嵐、松木、湯浅、渡辺、吉沢、村尾と沢山の優れた登山家が輩出した。そして野沢温泉のスキー合宿やら各所への登山を共にした小生は登山に就いて得難い先輩に偶然に恵まれた理である。彼等は昭和三年、小生は四年夫れ夫れ一つ橋の橋畔を去って娑婆へ出た。

それから五十嵐君は大阪の生活が永かつた様だ。懐しい山の友も世の中へ出たら仲々会つて快談する機会もなく別れ別れで殆んどお互に消息不明の儘大東亜戦争の敗戦を迎えた理だ。それから早や二拾数年の歳月が経過し漸く昔の山の友達の顔が見られる様になった時は既に彼等の顔には往時の紅顔の美青年の面影が消えて顔には沢山の皺が人生の年輪を物語って居た。何時の間にか人生の黄昏である。それでも会えば矢張り昔のトンちゃんでありトンちゃんである。終戦後一度五十嵐君を入れて筑波山に登った事があった。彼とは終戦後たった一回の山への旅であった。

細身ではあったが粘りのトンちゃんである。登山で御座れスキーで御座れ人生も粘って歩いた彼である。終点でも彼は粘ったが事であらう。玉砕型の小生が未だ歩き続けて居るのに粘りの彼は早やくも歩くのを止めてしまった。人生の終点は譬え命数とは謂え諦め切れない悲しい出来事である。私も村尾君も未だせつせと山へ登って居る。そして山を通して人生の幸福を満喫して居る。これからも恐らく終点が来る迄登り続けるであろう。そして沢山の山の頂からトンちゃんの冥福を祈り続ける事に仕様。

五十嵐数馬君の思出

村尾金二

五十嵐数馬君が八月二十二日急逝された。私はその四日前十八日（日曜日）の午後、友人と一しょに、国分寺の警察病院に見舞に行った。病室に行って見ると驚いた。トンちゃんは多病長寿、一病息災と云う言葉をするので口に十文字に絆創膏を貼って、腕に栄養を入れる点滴をしている。病気やその処置について全然無知な私は、何だか見る丈けでもこわい様な気がして、御本人も意識がハッキリしないらしいから、そのまま外に出て奥さんに容態を伺って、帰ったのが、六十五才までの長寿を保ったのだと云う事も考えられる。トンちゃん位「才子多病」と云う言葉のピッタリする人はないと思う。

そのトンちゃんが今年の一月末に入院した。いつも狼が来るとか云ってたが、今度は本当に狼が来たのか知らん、と云う奴がいた。然しやがて退院して存らまだ、もつだろう。熱さえ下れば又元気になるだろうと思っていた。

五十嵐君は生前、会うと必ず胃の工合が悪いとか、腹工合がよくない、心臓が弱ってる、肝臓、腎臓まで、とに角五臓六腑が悪いと、まるで万病の問屋の様な事を何度も何度も、そうだったので。

五十嵐君とは大正十四年に東京商科大学予科に入った時、同じクラス舎だったので知合になった。吉沢一郎君などとは明治中学時分から一しょだったから附合はもっと古い訳だ。

「彼は病気を楽しんでいるのだ」という人もいる。

「トンちゃんが、自分の病気の話をしてる時が一番自分の好い時で、本当に自分が悪くなると、そんなことは言わなくなるんじゃないか」と云う奴もいた。

無病短命、多病長寿、一病息災と云う言葉を聞いた事があるが、もっと早くなくなる筈だったろうか。尤も、トンちゃん位「才子多病」と云う言葉のピッタリする人はないと思う。

そのトンちゃんが今年の一月末に入院した。いつも狼が来るとか云ってたが、今度は本当に狼が来たのか知らん、と云う奴がいた。然しやがて退院して存らまだ、もつだろう。熱さえ下れば又元気になるだろうと思っていた。

五十嵐君は生前、会うと必ず胃の工合が悪いとか、腹工合がよくない、心臓が弱ってる、肝臓、腎臓まで、とに角五臓六腑が悪いと、まるで万病の問屋の様な事を何度も何度も、そうだったので。

五十嵐君とは大正十四年に東京商科大学予科に入った時、同じクラス舎だったので知合になった。吉沢一郎君などとは明治中学時分から一しょだったから附合はもっと古い訳だ。

「僕は四十何年間、病気の話を聞き続けて来た」と云う友人がいる。

トンちゃんと云うのは、顔が広くて、大きな丸い眼鏡をかけてるのがトンボに似てるからと云うのでいつも渾名だった。

トンちゃんは山岳部が出来た時入ったのだが、器用な人だったから陸上競技か何かも、やってた筈だ。その頃は、スキーは山岳部が冬山に登る手段として合宿をやったので一しょによく行ったものだった。大てい年の暮十二月二十日過と、三月二十日過に試験の終るのを待ちかねて、一週間位野沢温泉で合宿するのだった。

トンちゃんのスキー技術は実に柔軟で、深い雪の中で転んだなと思って見ていても、次の瞬間はチャンと立って滑っている。何と云うか、腰の粘りが、すごく強かったのだろう。

山に行ったのでは一つ丈け忘れられない印象の残っているのがある。大正十二年、話は予科二年生で夏休みに郷里の金沢に帰っていたら、九月一日に関東大震災が起った。九月中は勿論、十月になっても学校が何時始まるか分らない。記憶はハッキリしないが、十一月頃にトンちゃんが東京からやって来て暫く私の家に泊っていた。そして東京に帰るのに上高地を通って行くと云う。私も同行することにした。富山からその頃の高山線は何処まで行ってたか覚えてないが、歩いて猪谷、船津、蒲田。中尾峠を越して上高地に出た時は雪が二十糧程積っていた。偶然会った親爺さんに小屋につれられて泊ったのが、常さん、其人であった。翌日徳本峠を越して松本に出る。松本に父の知人で安田銀行（現在富士銀行）の支店長が居られて、父に紹介して貰って、訪ねて行って話してる中に、氏処の日本銀行支店に迚も山の好きな人がいると云うので会わせて貰ったのが藤島敏男さんだった。今考えて見ると何とも云えない奇妙な因縁の様なものが感じられる。会った場所は何処だったか思い出せない、藤島さんも記憶がないと云う双方忘却の渕の底にある古い話だ。

翌日はまた中央線で塩山に出て裂石から大菩薩峠を越えて丹波に下りる。氷川二俣尾まで歩いて（当時電車は二俣尾までしかなかった）東京に出たのであった。

トンちゃんは勉強もよくしたし、頭もよく、理論的だった。字も上手で綺麗な字を書いていた。怠け者の多かった山岳部の中では、トンちゃんは優等生の一人だったと思う。愚痴ることはあっても怒った顔は一度も見た事がない。何時も眼鏡の奥に微笑を湛えた眼があ

（八頁下段へ続く）

五十嵐数馬君を失う

松木謙三

昭和三年の卒業生は今年が四十周年に当り五月大会を箱根で開催した。その時入院中の者が三人居ったが五十嵐君もその一人で何とか出席できる様になってくれればよいがと話して居った処、直前退院となり前よりも肥って当日は元気で奥さん同伴でやってきたので一同大いに喜んだものだった。然しその後何となく元気がなくぶらぶらして居った。突然八月八日に熱があるので診断に行ったら即刻入院を宣告され四十度の熱が続き十日には心臓も弱ってきて唇や眼の周りが紫色になり、確かに重態の様相になったので近親者に召集がかかったが、その時は甘く収ったものの高熱は依然続いている。然し十八日頃は熱も八度台に降って小康を得ているので今度は会って話でもできるかと思い二十二日夕刻病院に行ってみた。処がその日は熱も降り気分もよくなったので便通のため私の着く直前に身体を少し動かしたのが悪かったらしく容態急変して一切面会謝絶で酸素吸入をしている状態で面会者は一切別室で待機を命ぜられた。五

時頃急に看護婦がやってきて未だ意識がある
から皆一緒に入って面会してくれというので
これはひょっとすると医師は駄目だと見たな
と思いながら病室に入ったのだった。話はできぬが意
識はある。訪問客の三井物産の水上君昭三会
の鎌田君神田精養軒の望月夫妻を見送って私
も帰途についた。その頃彼は息を引きとって
しまった。私共は見舞が死に目になった訳だ。
入院の時は五月退院後身体の悪い根元は歯が
悪いことにあると思い歯を全部抜いたのが悪
く敗血症に罹り発熱、入院後肺炎を併発して
高熱が続き、食事がとれず、暑ため半月も心臓も弱って倒
いのとで身体が弱りに弱り
れたわけだ。

五十嵐は平素いつも具合が悪い〳〵と口癖
の様に言っていたので、又かという位にしか
感じなかった。五十嵐は歯が悪いのと、塩辛
いものが好きなため胃が悪いのが持病だった
が去年あたりから肺炎が時々出ていた。併し
こんなに早くなるとは思っていなかった。
私共昭三の針葉樹会員も矢作・渡辺を失って
いるので後に残っているのは吉沢・村尾と私
三人になって了った。半分になった訳だ。又
戦前には湯浅・小栗も失っているので、三分
の二を無くしていることになり、何とも言え
ぬ淋しさを感ずる。私共のクラス風雲者が三分の一との報告
周年大会の時は死んだ
であったから昭和針葉
に早く死んだ事になる
も具合が悪いと言って
た。家の商売が染・整理屋だったので艶出し
機械がガタガタいって二階がゆれるところで
寝っころがって遅く迄山の話をしたのが記憶
に残っている。

戦後五十嵐は不遇であったが、戦時中その関
戦後日本電機―東洋精機―山種証券と変り何れも嫌な思いで勤務して居った様だった
が、故太田可夫君の世話で神田精養軒の専務
になってからは会社も陞々としており、望月
社長もよい人なので晩年は愉快に朗かになり、
又子供も六人いるが、娘二人はよい方に片付き男四人何れも大学を卒業して皆よい会社に
勤めているので安心して死ねたことと思うが、
これから余生を楽しくという時にほんとに惜
しいことをした。そんなことで戦後は山にも
スキーにも非常に安定したよいスキーで、山へも色
色の仲間とよく出かけた。私が一緒に出かけたが針葉樹会にはよく
た中で今も記憶に残っているのは彼と渡辺ク
ロちゃんと五月の山岳部を創設する時で
あるのが楽しかったのだ。

私共が彼を知ったのは大正十一年予科に入
じく三人で谷川岳から万太郎、仙ノ倉、法師
りその年予科三年の中温泉行、昭和二年の三月だったと思うがペン
部の奥野君が肝煎りで山岳部を創設する時で
私共のクラス風雲会からは吉沢、村尾、湯浅、
五十嵐、私と五人大挙して入会した時からだ。
彼は一言居士で よく意見を言ってくれた。又
山へもよく出かけたばかりでなく、皆で震災
にも残った彼の亀戸の家へ出かけたものだっ
た。家の商売が染・整理屋だったので艶出し
機械がガタガタいって二階がゆれるところで
寝っころがって遅く迄山の話をしたのが記憶
に残っている。

彼のことをトンちゃんというが吉沢君でも
つけたのか、ほんとにその通りだと思う。震
災で一ツ橋の校舎が焼けたので予科が石神井
のバラックに移った時中村橋に山の連中を中
心として一軒借りて動物園と称して五、六人
居ったがその時クマさんペンちゃんトンちゃ
ん等の名がつけられたのだ。あの頃が一番面
白かった時だったのじゃないか。

彼は予科に入って始めて習ったのだがスキ
ーも非常に安定したよいスキーで、山へも色
スキーにも行かなかった。私が一緒に出かけ
出てきた。山の話を聞
るのが楽しかったのだ
ロちゃんと五月の山岳
じく三人で谷川岳から万太郎、仙ノ倉、法師
温泉行、昭和二年の三月だったと思うがペン
ちゃん、クマさん、九郎ちゃん等大挙して針

ノ木峠。――平小屋――立山とスキーで遊んだことだ。今から考えるとワンダーホーゲル位のものだが、大正末期から昭和の極く始めの放浪主義登山の時代の事だから何れもニュールートだった訳です。

五十嵐はめったに歌わなかったが節廻しが非常に上手だったことなど思い出していると、磯野、渡辺、五十嵐と次々に身近の者が欠けていくのに言い様のない淋しさを感じている。

書評

『ロシュ・ゴルネ氷河の山旅』を読んで

望月達夫

一九六七年に行なわれた、われわれの仲間の東部ヒンズー・クシュ登山の紀行が、隊長山本健一郎君の編で刊行され、一読したので求められるままに読後感を述べる。

執筆者は数名に亘るが、全体を眺めてみると倉知敬君の比重が高く、纏め役も多分彼であったようだが、この登山の発端から熟知している私は、倉知君がそのの役を買って出たことも、この種の書物の出来栄えとしては、かなり高い点数を与えらるものだが、大正末期から昭和の極く始めの放浪主義登山の時代の事だから何れもニュールートだった訳です。

五十嵐はめったに歌わなかったが節廻しが非常に上手だったことなど思い出していると、磯野、渡辺、五十嵐と次々に身近の者が欠けていくのに言い様のない淋しさを感じている。

特に紀行の部分は、ところどころにヤマ場もあり、池知君遭難に屈することなく、ノーバイズノン・ゾムとウドレム・ゾム南峰をもんでサラグラール南峰にチャンスを見事につかよく纏ったチームワークを示していると同時に、その記述もなかなかいい。末尾の補注などにも、倉知君らの日頃の勉強振りがよくうかがわれて、これも私には嬉しいことの一つである。写真も現代の国際水準から云って貴重なものが少なくないし、また何枚かのカラー写真も含め、文字による表現を補って読者をたのしませてくれる。

まだ繙読されてない方があったら、是非ご一読願って、昨年度の日本の海外登山のなかで針葉樹会員のなかに、われわれの若い仲間は白眉と称されている、そして、一般の山の行動を知って戴きたいと思う宣伝願いたいと思うのである。

ただ私のややから、これがケルン叢書とかの一つに入れられたため、装釘そめられたことは、冊の紀行書としかったと私は思う。しかし、これは出版者側の意向であってかろう。日本の体裁をとった方がいいようだが、見識のない論だと思う。要は出云ってみても仕

そんなことよ分でない点に、その一つは、最初の山本君の記述の中のことだが、遠征資金の調達の方法として、一橋大としては、経済界に先輩の多い立場から、求めれば或いは、より多くの資金を外部から調達できたかも知れないが、海外の山と雖も、一橋山岳会ではできるだけ自分たちの資金で行くべきであるという平素から考えていること、山登りはそもそも他人のふところをあてにして行なうものではないと思っていること、この遠征も、その理想には若干へだたりがあったようだが、精神としてはそれを貫いて、隊員と会

員、部員とが最大限の資金を醸出したこと、さもありなんと思いこそすれ、決していやなこれらのことをはっきり書いて貰いたかった気分の起る話ではさらさらないからである。し、書くべきであったと思う。

もう一つのことは、今回隊員として活躍はしなかったが、計画の当初から参画し、倉知君と共にその推進役となり、更に留守をあずかって大役を完うした中島寛君について、隊員の一人々々に紹介のページをさいたのなら、当然一言も二言もあって然るべきであった。

海外登山をかりに演劇にたとえるならば、隊長以下隊員はさしずめ檜部に上った俳優であろうが、中島君の役割は演出者か舞台監督に相当するであろう。芝居が成功をおさめるには、無論俳優がすぐれていなくては、話にならないにしても、演出や監督がよくなくては矢張りいい芝居にはならない。中島君はじめ裏方側に回って努力した自分たちの仲間を、他人の前でほめるのは多少気がひけることだし、親しければなお更お互いに水臭いと感ずるかもしれないが、中島君のような信頼にたる後だてがあったことは、一般には解らないのだから、その点は矢張りはっきり書いておく必要が来るためには不可欠の点であることも、判らせておく必要があったと、私は思っている。

（ロシュ・ゴル氷河の山旅―一橋大・東部ヒンズー・クシュ紀行―山本健一郎編、菊変型判二八四頁、写真多数入、一九六八年七月一〇日　あかね書房刊、定価九五〇円）

（一九六八年九月八日記）

「遠い山近い山」を読んで

岩崎利一

かねてから、望月さんが人っ気のすくない山歩きを楽しんで居られるのを聞いていたが、その随想が一本にまとまって、今度は読者を楽しませて呉れることになった。冬枯れの茅戸を思わす様な色の函、ダンディな赤い布装の製本も感じが良い。内容の約半分を占める北海道の山は別として、十石峠や御座山などの所謂裏秩父の山々については、この本を読んで随分色々のことを想出すことになった。今は亡き林俊介さんと二人で、十石峠方面に行ったのは昭和十一年であった。このときの車中で、林さんが「山はね、君、かけて来て、暫くしてから、「山はね、君、心だよ」と言われたのだった。同氏は私より三年の先輩なので、山歩きやスキーの始めから手ほどきを受けたが、雨男の異名をとった人だけに、同氏との山行には悪天候の記憶が多い。甚しいときは、九月の立山・薬師で十日間殆ど降られ通しだったこともある。ところがこの十石峠行のときは、珍らしく一日も雨が降らなかった。それが特に印象的だったし、又、将来の見当がつかない様な時局下であっただけに、尚一層この山行の味をかみしめることになったのだと思う。そのときの記録を針葉樹九号から拾って見た。それに、この旅の印象をうたった拙作を添えて置かう。

一一、八、二九　晴　小諸（六、〇〇）‖小海（七、三〇）―梅峠（一七〇〇）―水ノ戸（一八〇〇）―十石峠街道―白井―浜平（二三、三〇）

八、三〇　晴　浜平（八、三〇）―坂下（一〇、〇〇）―（自動車）―新羽（一二〇〇）―志賀坂峠（一七、〇〇）―坂本（一九〇〇）

八、三一　晴　坂本（七、三〇）―二子山鞍部（九〇〇―一〇、三〇）―牛首峠（一六〇〇）―小鹿野（一六、一五）‖秩父（一九、三〇）

十　石　峠

「国道」と　地図は記せど
いと細き　踏みあとひとつ
上下四里　さびしき峠
はつ秋の　十石峠に
萩尾花　月下に神流川の谷を見に出かけたのも、この本に啓発されてのことだった。
虫の馨　かまびすしきに
いよよ増す　寂然の境
脚かろく　急ぎゆく身に
いづこより　聞ゆる笛か
静かなる　をどりの囃子
幾百丈　谷の急なる
ともしびも　さだかに見えず
杣人が　秋の祭か
若きどち　舞うてやあらん
思へども　よすがを知らず
想ひつつ　足を早めぬ
この峠　墨絵の山路
秋の絵のみち

反　歌

あまりにも谷深ければ秋祭
　笛のみ聞きて過ぎにけるかな

（一九六八年三月刊、三〇二頁、九六〇円）

望月達夫氏著「遠い山近い山」茗渓堂

九、一九（晴）　下仁田（一〇、〇五）―（タクシー）檜沢峠登口（一〇、五〇）―（タクシー）檜沢峠（一一、四〇）―檜沢峠（一一、五〇）―住居附（一三、〇〇）―十石峠街道八幡神社前バス停（一三、五五―一四、五〇）―（バス）万場町（一六、〇〇）

九、二〇（晴後曇）　万場（七、三〇）―西御荷鉾山（一一、〇〇―一二、三〇）―万場（一五、〇〇―一六、一〇）―（バス）新町（一七、五〇）

檜沢峠の上には「山の神」の石碑があった。道電線の工事のためにでも移されてしまったのだろうか。然し山歩きそのものの歓びは、その様な轄変を超えて、まさに移ろうことのない真実である。住居附あたりの渓流の美しさは、永く忘られぬ一駒となるであろう。西御荷鉾山頂の不動尊小像の傍に咲いて居た、色鮮かなトリカブトの紫と共に。（僻名遺原文の儘）

（四頁中段より続く）

あのあたりは今どうなっているのだろうか、と思いつつ三十年餘も経ってしまったが、この本によって色々のことが判った。それより自分の眼でもう一度見たくなった。檜沢峠の際範囲が非常に広かった。それから人との附合が実に上手で、交った。私達の何年か前の先輩から、ズッと後の後輩までよく知っていて、名前もよく覚えていた。何も知らない私は、人の集りの時はトンちゃんの横に坐って彼奴は誰だと聞いてたものだった。

そのトンちゃんが今は亡い。あの微笑をたたえた柔和な顔にも会えない。ユックリと永々としゃべる話っぷりも聞けなくなった。

悲しい極みである。

（終）

国際山岳連盟総会へ

吉沢一郎

今日は九月の一七日、ヨーロッパへの出発もいよいよ明後日に迫った。一橋山岳会に入会して「山」の世界に入ったのが大正一一年（一九二二年）それから数えると今年で四六年になる。ボートもやり、弓や馬もやった。だがそれらはいずれも中途半端で終ってしまった。学問も私の山のためには邪魔ものだった。昭和三年に、落第もせずに卒業出来たのが不思議なくらいである。

だが私の山登りも言ってみれば中途半端なものである。何をしたということもなしに四六年間は過ぎたが、それでも自分なりの道をまっしぐらに来たことだけは確かである。

それにしても私くらい幸運な山男はなかろう。よき先輩や友達、後輩に恵まれたことがその第一である。麹町小学校、明治中学、大倉商業、そして東京商科大学（一橋大学）、各大学や山岳部の先輩達、日本山岳会の皆さん、電通関係やら日本団体生命の先輩方。そして女性の中にも私は多くの良き支持者を得たし、又現在もそうであるように思う。

その上に私は言語、風習を異にする海外の岳人までをも多数友人としてもっている。これは私の、書き魔、通信魔としての余徳ではあろうが、それもお互いの間に、国を越えた誠意というものが通じ合っている結果ではないかと思う。

確かに私には誠意はある、しかしそれを形の上に具体化することは下手である。悪い悪いと思いながら、恩返しがなかなか出来ない一生出来ずに終ってしまうかも知れないが、そういうことをしたいと思う心だけは失っていないということを感じて頂ければ幸いである

この前アンデスへ行ってアメリカを廻って帰って来た時も、私は徹頭徹尾人の好意に甘えてしまったが、今度のロンドン行きも人の褌で行かせてもらうようなものである。頭のあがらないこと頻しいが、何かをやってくるということで御勘弁願いたいと思う。

前書きがバカに長くなってしまったが、今度の旅行のスケジュールを書けということなので簡単にお知らせしておこう。

◇

昭和四三年九月一九日（木）羽田発（オランダ航空）以下気儘に書いて行く。

アムステルダム〜フランクフルト〜ザルツブルグ〜ウィーン〜インスブルック〜ミュンヒェン〜シュタイル〜ダッハシュタイン〜ザルツブルグ〜フランクフルト〜スイス〜チューピンゲン〜シュツットガルト〜ロンドン〜ウェールズ〜ドールセット〜ロンドン〜マドリード〜NY〜ボストン〜バーリントン〜NY〜ワシントン〜NY〜メキシコ〜ロス・アンゼリス〜サン・フランシスコ〜レノ〜シアトル〜バンクーバー〜アンカリッジ〜羽田着（一一月一五日頃）

一九六一年にアンデスへ行かれたことも今から想えば夢のようだが、今度のことだって、そうである。

この間、三井物産の水上社長と一時間ゆっくり昔のことを懐しく話し合ったが、その時達三君は「君もとうとう貫いたね」と言ってくれた。私もそう思う。少年時代の私にいつの日か、準国賓待遇の形でロンドンの地を踏めるようになろうと考えたことがあろうか。

貴きは良き友であり、誠意であり、そしてたゆまぬ努力である。私はこれを〃自戒〃としながら、適当な時まで生きさせてもらいたいと思う。

では又現地からお便りをさせてもらおう。

（43・9・17記）

一〇才から六七才までのよせ書

――五色ケ原追悼山行

解散

中川孫一

御大中川孫さんと若い竹中君のほか いわゆる戦中派の連中が一一人。それにジュニア六人が加わって計一九名。さんの六七才から松下衛君の一〇才まで、大変バラェティに富むパーティで、何ともにぎやかな楽しい山行でした。

お墓参りの日だけは雨にたたられましたが、前後二日は良いお天気で、とにかく長い間の念願を果しました。以下は参加者全員のよせ書です。カッコ内に年令からいえば孫それぞれのジュニアです。なお行程は次のとおりでした。

八月一六日（晴）　立山一ノ越に全員集合、ザラ峠をへて五色ケ原へ

一七日（雨）　墓参、後平の小倉へ。斉藤、竹中は浄土越え至原、佐藤ら吉田山へ、佐藤堂から吉田山へ、佐藤は黒四経由帰京

一八日（晴）　黒部湖畔を黒四ダムへ

四十数年の山行を通じて、今度の友田慰霊碑追悼山行ほど楽しい山旅はなかった。

十九人という大パーティで親子孫の三代生か、遭難時の山旅の仲間であった。

友田慰霊碑は五色ケ原山荘の真向の西、北東を這松に囲まれたゆるい丘の西北隅に、二十八年の風雨にも何の損傷もなく、静かに建っていた。四角錐の頭を水平にたち切った、セメントモルタルで固めた大ケルンのような台石（自然石を積上げた台石は、一日がかりで山仲間が築造したという）の上に、地球儀のような丸い御影石を乗せ、正面に梵字を、裏面には友田純一君に捧ぐと彫ってあった。

かっての山友が、今にも降りだしそうな雨空へ静かに立ち昇っていった。

越中汎越の遭難地点を追悼しょうというプランは、間もなく降りだしてきた台風崩れの雨に阻まれてしまった。

又親達の山友の慰霊碑に詣でたジュニア達は、この追悼山行をどう感じとったであろうか。

立山から五色、黒四のコースは、山旅の経験浅いジュニア達にとって、相当の強行軍であった上に、快晴から風雨へと急変した山岳気象の体験は、高山旅行のモデルになったであろうに、一人もネをあげなかった。立派な後継者になれると思った。

しかし又親の一人がこうつぶやいた。

「山が好きになられると困るんですがね」

日江井　正巳

三十年振りで、剣沢か涸沢の合宿をやって居る様な錯覚をおこし、学生時代の気分になりました。御蔭様で商売のいやな話も忘れ、ストレス解消に特効薬となりました。
友田君も喜んで呉れましょう。
二世はともかく、中川さんの元気には敬服しました。

大塚　武

一の越で一九人集ったときは、一寸した感激でした。こうして山の中で顔をみるのが一番ですね、忙しいなかを各地から沢山はせ参じて、友田君の霊も喜んでくれたことと思います。

大塚明子（一九才）

大変楽しい山行でした。機会があったら又連れていって下さい。

宮城恭一

五色ヶ原の友田君記念碑にお参りができて、肩の荷がおりた感じで一杯です。東京・大阪名古屋等から、碑の前に集り、讃山賦を歌ったときは感激でした。昔（約三十年前）一緒に山に登った方々と大勢再会し、一緒に行動

し、その上ジュニアを連れて来られる方も多く、こんなに愉快で、感激的な経験は始めてです。しかし歩くピッチは、ジュニア連中にかなわず、年令を感じましたが、マイペースで歩けばどうにかなる自信も得ました。雨天一日をはさんだ晴天二日も、バラエティに富ませてくれました。この企画を実行された幹事に敬意を表します。

宮城建一（一八才）

皆さんのお話し、特に中川大先輩のお話しが、大変面白かったし有益でした。おやじの登るときの遅いのと、皆さんが良く喰うのにあきれました。

佐藤政雄

久し振りに元気な諸兄に会い、楽しい山行が出来ました。幹事さん有難う。
八月始、会社の軽井沢寮に二泊三日、女房子供連れで浅間山登山に休憩をとったので、今回の参加を躊躇して富山行の切符の入手に失敗。今後雪渓のある夏山登山も機会がないと、ガイド・ブックにて、大町黒四ダム経由にて可能な事を知り、思い切って参加。幸い第三日馬の切符も入手出来た。

一六日。早朝の松本は雨上り。七・四五予定通りダム到着。評判のダムも、周囲の山に比べ小さく感じた。観光客満員、関西弁が多い。タンボ平にて青空を眺め、入れるものは入れ、出るものは出した。東一ノ越への登りはきつかった。積線に出て風強く、肌寒い女の子がスケッチしていた。一ノ越かと一寸錯覚。時間的にも周囲の状況もおかしい。
長い緩慢なトラバース。五色小倉にて合流と考えていた処、山田兄が飛出してきた。感激の握手。卒業以来の先輩諸兄に挨拶。二世も多数同行、一九名の大世帯、中川大先輩の元気に驚く。
学生時代の縦走を思い出す。「駒草の話」「小倉泊りでスイスイと歩いてみたい」とか。
好天に恵まれ、眺望も絶景。空気が甘い。
ザラ峠への下りは全く悪路だ。アルコールの水割、朝酒。
一七日、迷走台風の雨模様。這松の片隅に、二七年の風雪に堪え昔の儘、立派な碑だ。焼香、讃山賦（忘れた）　雨の山小屋滞在は気が重い。一・三三の黒四のトロリに間に合えば、新宿九・四七着。思切って下山帰京とする
七・四五（五色小屋）九・〇五（平小屋）
一一・四〇（ダム）ダム近くで遠雷三発。黒

部湖畔の道は立派だ。平の釣橋は今は夢。一二・〇三は満員、一二・四一臨時トロリー、汗と雨でズブ濡れ、着替える。大町にて第三白馬座席指定券を入手、松本にて自宅に電話手打ちそばを食べる。竹葉亭（？）の鰻は時間がない。予定通り帰京。

輸快な登行、感謝します。

根本大

年が何処かへ行ってしまったのでしょう。フーフー言いながら、口だけは現役の時と完く変らないお互。

十六日、晴れきった空と山波が、一行を浄土のように包んでくれました。

十七日、雨に雨。しかし雨には雨の味があった一日でした。

斉藤三郎

二十何年ぶりで会っても、一向にその間の時間を感じないのは、山というもののせいでしょうか。頭はいくらか白くなり、シワはふえていても、中味はまるきり変っていない。

然し一日目のていたらくでは、親父連中は今後家で山の功名話はできないのではないですか。

二日目、皆と別れてからは、何の因果かものすごく降られて、而も越中側は冬の富士山と思わす烈風で息もつけず、ザラ峠から至堂までノンストップ。五色から至堂まで三時間半。弥陀ケ原まで下りたら日がさしていました。翌日足がどうかと心配しましたが、何のこともなく当分は大丈夫です。又どこか行きましょう。

山田亮三

佐藤や斉藤の歩き方など、まるで昔に変らない。あきれましたな。それにしてもよく飲みました。大変うれしかったせいでしょう。

孫さんのジョニーウオーカーもよかったが、圧巻はゴムちゃん、失礼、宮城さんの純粋アルコール。実にうまかった。またどこかに行くときはもってきて下さい。

平、小屋で、山本溢弘君と加藤正巳君に逢いました。黒部の上の廊下に入ったそうです

佐野茂雄

二八年振りの山行の断想を

一、人は適応、順化に際立った存在ということ。――三十度をこえるわが家をでて、二十度の会社で八時間、三十度の全く裏玄関そのものの上野駅の雑踏、ないと思っていた急行越前の冷房車、午前四時過ぎの富山駅頭山行の人の波、電鉄、ケーブルカー、バス、至堂到着、残雪と、めまぐるしい温度変化、人と機械の相、いやほんとに驚きでした。

二、年はとりたかねーもんだとはあまり言えぬということ。――一週間前から、九階までエレベーター廃止で頑張ったが、つけ焼刃もいいとこ、山では伜の後塵をはいするオソマツ。遭難のとき一緒に下った佐藤さんの健脚をわが身にくらべ羨むのみ。

佐野茂樹（一二才）

ぼくは五色の小屋でかんぱいしたことが、一番頭に残っていて、とても楽しかったです

これから毎年開いていただくと、ぼくもとてもうれしいです。

松下順吉

室堂のすさまじい変り様、雄山の喧燥と雑踏、それにザラ峠へのきつい下り。思いがけぬことの多かった中で、五色ケ原の静けさ、清らかさ、やさしさは、二十六年前の建碑の頃そのままのものでした。

松下　聡（一四才）

北アルプスの登山ははじめてでした。少しつらいところもありましたが、雄山にも登れ、とても楽しく、三日間をすごせました。また北アに行ってみたいと思います。

松下　衛（一〇才）

かぜをひいていたので、少しつらかった。けれど、立山に登れたのでとてもうれしかった。五色ケ原から平ノ小屋へ行く時の雨で、雨やいやだな、とつくづく思ったけれど、山登りはおもしろいので、また登りたい。

小林　茂雄

スイスイと一気に滑降するのが勿体なくて……という（あの経験を持たれない御方もあろうが）のとは逆に、アレヨという間に室堂まで持ち上げられて、重荷に喘いだ〝強者どもの夢の跡〟など、どこにも見つけることが出来なかった。一の越でも面白い混成勢揃い。一〇才から六七才まで一九名の、何とも美しい五色ケ原、あの当時、剣沢を昼頃たって、ダラダラの尾根道を飛ばして、明るい中に五色ケ原の本隊に合流したっけ……と想い乍ら行けば、何がダラダラなものですか、又もや「こんな筈ではない」経、上ったり下ったり、ザラ峠でガクガクになりました。

×　×

此の頃のOBは皆さん心得たもので、チャンと帽子なるものを着用しておられる。ヒタイから上がかくされているとは、あとはどれも、そう変り映えのしたものなのに。

×

伴をつれて皆さんと山行きを共に出来るなどとは思ってもみなかった。

×　×

その節は、中川先輩、斉藤先輩と一緒に、地元から参加させて頂いた私としては、或いは空のキスリングでおりるまわりの山々、夏の雪渓発前に考えておりは、決してヘバラなかったが、サブザックで参加したところ、先輩のザックの大きさにその面くらったことだろう。遠見し、案ずるより生むが易張り切り振りを拝し、流石共鍛えた先輩方は一人の落伍者もなく、天候にも恵まれて、途中元気なジュニア部隊も追い抜かれる佐藤、斉藤両強者もあり、夕方迄に全員五色ケ原山荘に到着。

全員集合後、ウイスキー、ブランデー、更尾根づたいに見えるまわりの山々、夏の雪渓、そして冷たい空気、みんな期待していた以上のものだった。

伊藤　悉生

大変ユカイでした。第一日目はどうにもエラかったが、二日目からだんだん快調になり、東京に帰ってきたときは最高。もっとも東京生活一週間が逆もどりしました。もう少し山へ行けということがもしれません。

竹中　彰

初めて登山靴をはいての本格的な登山に胸おどらせ、ちょっと不安もだった。名前にそむかない美しい五色ケ原、

充（一三才）

には純粋アルコール、奥様手作りの珍味まで出て豪華な酒盛り。友田先輩遭難当時の思い出、或いは最近の山行の話等に花が咲く。

翌日は友田先輩を訪れ、線香、花等を供え久し振りに讃山賦合唱。

平に下る本隊と別れ、斉藤先輩と共に、再びザラ峠から一の越へ向う。折からヨロメキ台風が日本海を北上中で、この影響を受け、積線は風速二〇～三〇mの風と雨で大荒れ、天候が悪いため途中殆ど休憩もとらず、五色ケ原から三時間少しで室堂着、bus-terminal で冷え切った体をポケット壜一本を二人で空けて暗めた次第。ヤレヤレ。

× × × ×

〃地方会員の方々へ〃　編集係

編集係では、会報を一層身近かで、幅広くするために、在京の方々だけでなく、地方で活躍されておられる会員の方々の様子をご連絡頂き、皆様にお知らせしようと考えております。そこで、私共編集係からも通信をお送りしますが、さし当り、通信連絡係として左記の方々になって頂くことに内定致しましたので、お知らせ致します。

関西地区　石田信隆（四一年卒）
三菱銀行南支店
電・〇六ー二一一ー八九三一

中部地区　加藤正巳（四三年卒）
三井信託銀行名古屋支店
電・

ヨーロッパ短信　吉沢一郎

羽田からオーストリアのザルツブルグまで正味17時間、この間二度の日の出があり、ややではなく非常な睡眠不足にやられました。アラスカのマッキンレーとフォレーカーは思ったより他の群山を抜きん出ていました。写真は機中から20枚ぐらいとりました。ザルツブルグとアドルフ・ディムベルガー博士の世話になりました。静かでいい町です。故ヘルマン・ブールの奥さんと娘さんも訪問しました。インスブルックのアルペンフェラインを訪問した後、白い真中のホテル（絵葉書の写真を指す―編集係註）に泊まりました。その夜は吹雪にあいました。ではいずれまた。

九月二六日　ザルツブルグにて

（吉沢一郎氏は、国際山岳連盟総会に出席するため、九月一九日離日、約一ケ月の予定で訪欧中ですが―前掲註事通り―、このたび、チロルの山々の写った美しい絵葉書と便りを寄せて頂きましたのでご紹介致しました。―編集係註）

可先生一周忌とオーシャン会

吉田義則

可さん一周忌コンペの件

可さんの一周忌を期し、左記の通りコンペをやることにしよう。参加あるべし。

きが　期日　七月四日（木）
は　場所　八王子GMG
便　行動予定　27ホールズのあと可さんの墓参り。柴崎宅で乾杯
郵　費用　〇〇〇〇円

しかるべき返事、至急に。

発信日　43・6・15
発信人　石和田四郎
宛先　オーシャン会各位

可さんが亡くなってまたゝく間に一年が過ぎた。七月四日の命日は、これから毎年みんなで何か追悼行事をやろうという話は以前からもちあがっていたが、墓参だけでは何かもの足りない、みんなが集ってにぎやかにやることが好きだった可さんのこと、われわれも

一つ大らかに、にぎやかに追悼しょうじゃないか、ということで当日は全員休暇をとり、ゴルフ・バッグをかついで朝七時に八王子駅に集合ということになった。

本来われわれの追悼行事は「追悼登山」でもやるのが本筋かも知れないが、幸か不幸か七月の初めはまだ梅雨の最中であること、又オーシャン会の面々はとしに似合わず登ることが得意でなく、おなかの出た連中と同じ程度の運動量が適当と考えているものが多いので、登る話はなかなかまとまらない。

オーシャン・ゴルフコンペは既に第一回を二年前（四十一年五月）にやっている。この時の優勝者石和田は、優勝カップがないことに大いに不満をもらし、後日可さんにオーシャン会のためにカップを進呈されたいとご注進に及んだ。名付けて「可盃（べくはい）」とすることに話もきまった。

それから一年、国立にみんながそろって集まる機会もなく、そろそろもう一ぺん「可盃」を催促旁々可さん宅に集まろうかと思っていた矢さきに先生は逝ってしまった。

そんな経緯からわれわれとしては当然に「可盃争奪コンペ」が追悼行事に一ばんふさわしいような気がしたのである。

西多摩の丘陵にある可さんの墓前に立つと、多摩川の谷を隔てて向う側に立川国際の緑のコースが望まれる。前に墓参に来たとき「一度あのコースで可さんにいゝところを見せてやるか」などと云ったものがいる。実際には、とび切り安くあげる必要その他もろもろの事情から、甘利、柴崎両君で世話してくれた「八王子GMG」というあまり聞いたことのないコースへ案内された。

問題のカップの方は、某君が可先生になり代って持ち込んでくれたので大いに士気高揚したわけだが、何せ前日まで連日の雨だったことと、芝がまだ落ちついていない出来たて（？）のコースなので皆コンディション悪く、スコアーは大荒れに荒れて、こゝに発表するのははばかることにするが、大阪からはるばる遠征した春日井に優勝をさらわれ、「可盃」は早くも箱根の関を越えて関西へ持ち去られてしまった！

当日参加者（順序は必ずしもコンペの順位ではない）

春日井実（大阪）　松尾寛二
石和田四郎　中村幸正（高崎）
甘利仁郎　宮川次夫
吉田義則　柴崎　新

柴崎君義弟――ゴルフのみ特別参加

以上九名

予定では27ホールを廻るつもりだったが、コンディション不良と夕刻からの如水会館での追悼会に出席する関係上、まだ日の高い二時半頃18ホールで打ち止めとし、その足で西多摩霊園へ向った。

可さんも「おまえたち、命日だというのにいやに賑かにやるじゃないか。まあそれでよろしい。ゴルフのスコアーなどどっちでもいゝことだよ」と云ってくれてるような気がした。

当日は墓参のあと如水会館で催された一周忌追悼会に参加者全員で出席した。

毎年七月四日は可盃コンペということになるか。いつまでも泥まみれのゴルフでは申し訳ない。少しずつ腕を上げて追悼の日にふさわしい精神的余裕をもってプレーできるようになりたいものである

（以上）

四国の山々

岡田健志

「表四国」、「裏四国」という区分の仕方があることを知ったのは、私が四国へ来て一年半程経った最近のことである。前者は瀬戸内海に面した愛媛、香川を指し後者は太平洋に面した高知、徳島を指す。この「表、裏四国」を区分する基準としてはその目的に応じて気候、産業、人間等多々考えられると思うが、そこに殆んど必ずと言って良い程語られるのが四国山脈の存在である。この四国山脈が四国を「表、裏」に分ける重要な存在であることは、身近な例を挙げれば台風による被害に関する新聞記事を思い出して頂ければ、理解して貰えると思う。裏四国が毎年大きな台風による被害を受け室戸岬が台風銀座とまで言われるのに対し、表四国では殆んど台風の被害発生ということを知らない。この一つの原因に、南方海上から北上した台風も、西風とこの四国山脈にさえぎられて進路を東に転ずることが考えられる。方向を変えた結果「表四国」には降雨量が多くなることはあるけれども、殆んど被害がないというのが実情である。

四国山脈は海抜一九八一米の石鎚山を盟主とする石鎚山系と、海抜一九五一米の剣山を盟主とする剣山山系に大別され、東西二五〇キロ、南北五〇キロにわたるもので、東西に走る何本かの構造線を境界線とした断層山脈である。四国に来て未だ日の浅い私は石鎚山系の東西四〇キロにわたる区域しか知らないが、この山脈の北側は断層による地形を如実に示す急峻に落ち込みを見せるのを教えられた。このことは高度差一〇〇〇米～一三〇〇米の山麓の部落へ行くのに海岸からバスで一時間も来れば充分であることを思えば又明らかであろう。従って北側から山頂に達するには、この高度差を三～四時間で稼ぐことになり、かなりのアルバイトを強いられることになる。

南北アルプスのアルペン的なたたずまいの中で育った人に対して四国山脈は訴えるものに乏しいかも知れないが、山の中に居ることに喜びを感じ、山登りを楽しもうとする人に対しては充分なものを持っている。スケールは小さいが石鎚山には三ッ道具を使用するルートもあり、瓶ケ森（一八九五米）、笹ケ峰（一八六〇米）に代表されるような一面の広大な熊笹の緩傾斜帯に立枯れた白骨が点在し、可憐なリンドウの咲き競うような山頂もある。観光的、宗教的な登山対象である石鎚山を除けば比較的静かな山登りを楽しむことが出来るし、積雪期の登山者は極端に少いから、自分のトレースを処女雪につけることも出来る。

このように四国山脈は四国の風土に決定的とも思われる前提となっていると同時に登山者にバラエティーに富んだ対象を提供する一面も有している。私の足跡も現在の所石鎚山系に限られているが、そのうちに大きく広げて行きたいと思っている。

―山岳部バッジ製作致します―

従来部員に配布され、シンボルとして親まれてきたバッジ（ピッケルにザイルの組合わせ、一橋の文字）も残部がなくなりましたので発注致しますが、会員の方々の中にも紛失されて残念に思っている方もあろうかと思います。ご希望の方は左記まで。

佐藤久尚（総務担当幹事）
日本輸出入銀行庶務部
TEL・二七〇－四三一一まで。
製作費は、五〇〇円～一、〇〇〇円程度。

会員便り

鈴木英雄

八月一五日。韮崎市へ用事で出かけた帰りに瑞牆山荘に一泊。客は小生一人。風呂は専用で良い気持。夜雷雨、翌朝飯前に散歩の積りが遂に頂上に至る。男女数人あれこれパックのを見つつバンドを締め直し、朗吟飛下る。祝融峰ならず、空腹をおさえつつ山荘に下る。

八月二六日。台風十号もどうやら西に去った様子に、愚息を連れて新宿発、雨の中央線で車窓の風景もフイ。松本では薄日も洩れて来たので、気持をとり直して静かな上高地を通って徳沢園に泊る。

八月二七日。長塀山・蝶ケ岳を経て横尾水荘に下る。穏かな日和だったが、南西方面の空模様が気にかかる。果たせるかな夕方より豪雨となる。

八月二八日。滞在

八月二九日。小雨の中を涸沢に登る。午後風雨強まり、Uターン台風通過。ヒュッテのアルバイトさん達とお茶をのみながら岩に鳴る風の声を聞く。ここの飯は最高と愚息喜ぶ

八月三〇日。正に台風の中を穂高山荘に向う。テント数張り。鼻水をすすりながら奥穂にしばし佇み、岳沢に下る。夜冷え込み、星美し。

八月三一日。帰京、新聞で穂高の初霜を知った。

今夏は日曜日の鈴鹿行でごまかしていましたが、先日、九州は阿蘇に遊んで来ました。山もそろそろ静かになる九月から行動開始です。

大橋喜治

至極元気にて多忙な日を送っております。ボツボツ近所の山でもとかなかきっかけがつかめます。

佐々木誠

甲子園の同じ町内に住んでいる船本兄とは時々お目にかかっていますが、その他の会員諸氏とは一年以上会っていません。近頃気力体力とも頓に衰退したのか、山の方もさっぱり御無沙汰ばかり。先輩各位の活躍ぶりを会報誌上で拝見する度美しい限りです。血圧と胃病のため、毎日医者通いの状態では何をか言わんや、簡単ですが近況報告まで。

高橋要二

竹中彰

八月一六日、一七日両日、針葉樹会中川大先輩以下先輩諸兄と五色ケ原の友田先輩遭難碑へお参りに出掛けました。帰りはオカシナ台風の影響で雨と風に散々やられました。八月三・四日両日は剣の麓を、テントを持って歩いてきました。二股はいつ行っても良い所です。

月達夫

八月は恵那山と奥利根の平ケ岳とに登りました。幸い元気でおります。

御結婚おめでとうございます

小野　肇氏（40年卒・北海道電力勤務）

は、九月吉日、めでたく御結婚されました。如水会館で行なわれた披露宴には、山岳部関係者をはじめとして、八十人余の方々が出席、夫妻の前途を祝福しました。

住所変更

黒田正治　松戸市中矢切北台四八八
　電　〇四七三ー六三ー七四五二
河相　薫　藤沢市鵠沼桜ケ岡
　二ー八ー三一
白川隆夫　武蔵野市中町一ー二六ー三
　電　〇四二三ー五二ー四三九一
　勤務先　イソライト工業㈱
　東京支社　千代田区神田
　鍛治町
　電　二五六ー四七一一(代)
石原　脩　神奈川県鎌倉市今泉柳谷戸
　一三〇五ー一五(五八)
小林茂雄　大阪市住吉区長居西
　四ー二〇

斉藤　正　国立市東区三ー一一

会計中間報告

原　博貞

九月一七日現在、左記二九名（内二名、六七年分）の方々から会費を納めて戴きました。一息ついた状態ではありますが、未納の方も、何卒御協力お願い申し上げます。尚、九月末より、在京会員に対しては学生がお伺いする予定となっておりますので、宜敷く御高配賜りたくお願い申し上げます。

中川孫一　村尾金二
吉沢一郎　河相　薫
増山清太郎　高見　要
黒田正治　柿原謙一
岩崎利一　佐野茂雄
杉下順吉　野尻七郎
大橋喜治　大賀二郎
斉藤　正　佐藤之敏
近藤恒雄　松木謙三
手塚晴雄　久保田礼治
鈴木英雄　岡田謙三
望月達夫　佐々木誠
山田亮三　根本　太
笠原広信　高橋尚好
竹中　彰　多田伸治

会務報告

佐藤之敏

十二日　六時半～九時
会館
、吉沢、近藤、増山、柿原、
大塚、佐野、山田、松下、
西村、山本（健）、岡垣、
中島、大賀、山本（尚）、石、
多田、三森、佐藤（之）、
久）、平川、池知、原、斉藤、
加藤　以上三〇名
による出席　五五名
八五名（定足数　六七名）
四二年度活動報告の件
―承認
般活動報告―中島幹事
征隊近況報告―山本隊長
四二年度会計報告―承認
（尚）会計幹事より報告
任期満了に伴う交替の件
―承認
遠征隊に参加した会員が中心

議案
(一)昭和
(二)昭和
山本
(三)幹事
前年
(イ)一
(ロ)遠

となって幹事団が組まれた。詳細前号会務報告に記載済。

(四)会費値上げの件（昭和四三年度予算案承認の件）――承認

(イ)新制会費

卒業後三年目まで――二千円

〃　四年目まで――二千五百円

〃十一年目以前――三千円

(ロ)徴収方法についての提案

卒業年次五年単位程度で徴収責任者を決めて徴収の徹底をはかる。

(ハ)基金設立についての提案

会員とは別途に、ボランタリーな形で会の基金を設け、臨時出費（遭難や会の一大行事、遠征、山小屋建設等）の財政的基礎をつくる――幹事団が更に検討する。

(ニ)会報の定期発行についての若干の意見

二、五十嵐数馬氏葬儀参列の件

八月　日、五十嵐家自宅にて行なわれた告別式に、中川孫一、松木謙三、吉沢一郎、望月達夫、岩崎利一、佐藤之敏が参列し、針葉樹会として香典並びに盛花料として、一万円をお供えして弔意を表す。他に中川夫人、村尾夫人、村尾金二氏夫人、同御子息が参列された。故人の同時代の会員が折悪しく山行に出られており、参列できなかったことは、まことに不運であった。

三、才一回幹事会

日　時　七月一六日（火）

場　所　如水会館

参加者　幹事全員

総会で提案された会費徴収方法について検討、次のような方法で徴収することが決った。

才一段階として、徴収開始より二ケ月間は、都内は若手OBと学生を中心にして足を集め、地方は振込を利用して徴収する。（払込用紙は東京より送附）才二段階として、未納会員について、各年代の責任者が督促連絡する。

尚、幹事会は、毎月二回の若手OBのヒマラヤ研究会と並行して、随時開かれております。

四、秋の懇親山行

日　時　八月二〇日（夜）～八月二四日

場　所　穂高周辺

参加者　村尾、柿原、久保、中村（幸）、吉田、中島、倉知、平川、石田、中村（雅）、宮武（学生）

行　動

二〇日（金）夜発

新村橋際奥又側にB・C。パーティを分け、各自の好みに応じたルートを採った。

二二日

○村尾、柿原・中村（雅）、宮武、槍沢より天狗原。村尾・宮武はそのまま北穂まで。

○中島・倉知　中又白谷より前穂東壁右先稜登攀、中又白谷はプリミティブな趣きをもち、秋晴れの下、紅葉の中の登攀は正に痛快の一語に尽きた。

○吉田・平川　又白池より北尾根五、六のコルより前穂―奥穂―涸沢小屋。

○中村（幸）　涸沢ヒュッテよりザイランを経て奥穂―前穂―上高地。

二三日

久保・宮武　大滝―常念。

この連休は今年最高の人出で、猛烈な込み様であった。

お知らせ

総務より

一、「月見の宴」の件

恒例の月見の宴の時期が近づいてまいりましたが、今年も一一月二日または三日に開催の予定でおります。例でおりましたが、今年は故大田先生のお宅も引越されて国立になく等考えて、ひとつ趣をかえて、高尾山に寄り集って、紅葉の落葉を焚いて酒くみかわすのもよいのではないかという案も出されており、現在検討中です。詳細は追ってご連絡する予定でおりますが、従来ともすれば在京会員、それも特定年代の会員に参加が限られているのは誠に残念なことです。つきましては、沢山の方々が今年は皆様お誘い合わせてご便宜を設けており参加されるよう望みます。

二、『ロシュゴル氷河の山旅』（一橋大・東部ヒンズークシュ紀行―前掲「書評」欄参照）の会員特別頒布について

望月達夫氏の書評でご紹介ありましたが、今般皆様方のご支援・協力により上記の発刊となりました。会員の方々、また特にご協力頂いた方々に対し、特別価格にてお買い求め戴くようご便宜を設けておりますのでご利用下さい。

連絡先は、

倉知　敬　日本ナショナル金銭登録機
フィナンシャル・コマーシャル システム部
東京都港区赤坂一―二―二
（郵便番号一〇七）
電・五八一―六一一一

三、〝ウィークデイ・クラブ〟結成

今夏八月に行なわれた友田氏の追悼山行を機に、主として在京の元気一杯の〝古参〟（？）会員の間で、若い者に負けずに、静かで落着いた山登りを楽しもうという声が高まり、久保孝一郎氏・山田亮三氏らを発起人として〝ウィークデイ・クラブ〟が結成されました。名称は、趣旨に添って、騒がしい週末を避けて、平日に登ることを目的としたことからつけられたものです。在京会員の方々も奮って参加して下さい。

編集後記

五十嵐先輩が亡くなった。私が会報編集を担当しはじめてからわずか一年余のうちに大田先生・五十嵐氏とお二人の追悼を会報に載せなければならないのは非常に残念である。お二人のご冥福を心からお祈りしよう。それにしても本号の編集には多くの会員の方々のご協力をうけた。お蔭で先の会報で中川会長にお叱りを受けた「多くの会員の会報への参加」ということも、多少なりとも果たせたのではないかと思う。今後ともご協力をお願いすると共に、私達幹事自身、もっともっと努力しなくてはと思っている次第です（平川）

――×――

今回は中川会長をはじめ、多くの方々から自発的に寄稿を頂き恐縮しております。今後はただ原稿をご依頼するのではなく、アイデアをきかして「書きたくなる」ような雰囲気づくりをしてみたい――そんなふうに思いました。今度の編集は、何分にもはじめてのことでもあり、平川さんに教えて頂くままなんとかまとめてみたというのが実情です。御寛恕の程。これからも更に「原稿督促魔」になるつもりですので宜しくお願いします（斉藤）

OH

写真説明

クル・マカルー（二〇八三〇フィート）
トスナラ氷河源頭一八〇〇フィート無名峰から
撮影。

倉知敬